

# 社会人ヨセフ



信仰と生活シリーズ1

シリーズ総監修 平山高明司教  
著者 湯川丈一



くすのき出版

信仰と生活シリーズ1 社会人ヨセフ

くすのき出版

社会で生きるキリスト者に、福音の光に照らされた日常の仕事のふかい意義を、やさしく説き明かす講話集。日々の勤勉な労働で聖家族を守り、養い支えたヨセフの聖なる生涯を通して、社会人としての独創的な生き方に迫る。



くすのき出版

定価380円 (本体362円)

# 社会人ヨセフ

信仰と生活シリーズ



著者 湯川丈一

監修 大分教区司教 平山高明



くすのき出版

くすのき出版

# 社会人ヨセフ

信仰と生活シリーズ

1

## 目次

<b>第一章 本当のヨセフは</b>	
ヨセフのイメージ	3
偽りのヨセフ像	5
<b>第二章 ナザレの生活</b>	
ナザレの職人	9
仕事を尊ぶ	11
貧しく生きる	13
<b>第三章 ベツレヘム行き</b>	
市民権	16
旅の準備	19
旅の仲間	21
<b>第四章 ベツレヘムで</b>	
宿探し	25

NIHIL OBSTAT QUOMINUS IMPRIMATUR  
Sac. Ludovicus Suchan, SDB.  
censor librorum  
Die 20 mensis maii anni 1998

IMPRIMATUR  
+ Petrus Takaaki Hirayama  
Episcopus Oitaensis  
Oita, die 20 maii anni 1998



最善を尽くす	29
多忙の日々	32
出産祝い	35
信じる人の道	38

### 第五章 エジプトへ

社会の日向と影	42
困難を恵みに	45

### 第六章 再びナザレへ

神の友	50
日常生活の偉大さ	52

あとがき	58
------	----

参考文献	61
------	----



## 第一章 本当のヨセフは

### ヨセフのイメージ

ずいぶん前のことですが、ある小教区で青年たちによるクリスマス劇を見たことがあります。ヨセフが、既に妊娠していたマリアをロバに乗せてナザレからベツレヘムへと大変な旅をした末に、ベツレヘムでは宿がなく、しかたなくある馬小屋を借りて、そこで幼子イエスが誕生するという筋書きだけだっ  
たと思います。

その中に、私のはつきりと覚えている場面が一つあります。ヨセフがベツレヘムに着いてうろたえながら宿を探すシーンです。宿主から断られるたびにヨセフは弱々しく、「主よ助けてください」、「私たちは主のご命令にしがたがってガリラヤからやって来ましたのに、宿がないとはどういうことで





しょうか」などと、嘆くように天を仰いで神に語りかけていました。

さすがに、時間をかけて練習をしたと見えて、青年たちの演技には熱が入っています。しかし、私には「ヨセフはこのような人ではなかった」、「ヨセフはこんなことでうるたえるような人ではなかった」、「このようなヨセフだったら、マリアさまは不安でたまらなかつただろう」という思いが心の中でうず巻いて、せっかくのクリスマス劇も青年たちの名演技も楽しめませんでした。

それでは、「あなたにとつて、ヨセフはどのような人物だったのか」ときかれたなら、私はためらうことなく「福音書に登場するヨセフは、そのような弱々しい、頼りない人ではなく、しつかりした堂々たる社会人だった」と答えるでしょう。

私は、毎日聖書を読んでいましたので、本当にそう確信していました。ところが、私が思っていたヨセフは、実は、福者ホセマリア・エスクリバー師

が説いたヨセフであつたことに、あとになつて気がついたので。<sup>(1)</sup>

カトリック司祭になつてから、機会あることにヨセフの本当の姿について話すようにしてきましたが、話を聞いた人々は必ずと言っていいくらい、「こんなヨセフさまの話は始めて聞いた」、「聖ヨセフがこんな人だつたとは知らなかつた」、「ヨセフさまが何か身近かになつたみたい」と、言っていました。私は、ますます誤解を解いてヨセフの名誉回復を図らなければならぬと思うようになったのです。

### 偽りのヨセフ像

四世紀ごろから、後世「新約聖書外典」と呼ばれるようになった書物が盛んに出回り始めました。特に、イエスの幼年時代、マリア、ヨセフ、ユダ・



イスカリオト、ピラトなど、福音書の中で記述の少ない事柄や人物について、善意の人々が何とかそれを補おうと今で言う「歴史小説」風に書いたものです。カトリック教会は、そのような「裏版（アポクリファ）書物」を史実ではないとの理由で、キリストの弟子が書いた書物とは、はっきりと区別しましたが、ヨセフに関しては何か未だに「外典」のイメージから抜けきれないように思えます。

聖トマによって書かれたと伝えられる「外典」は次のようなヨセフを描いています。「イエスの父は大工で、すきやくびきを作っていた。ある日、裕福な人からベッドを作るよう依頼を受けたが、左右の板の長さが揃わず困っていた。すると幼いイエスは、同じ長さになるように短い方の板を引っ張った。父ヨセフは、わが子を眺め感嘆し、抱擁と接吻を浴びせて言った。『私は幸いな者だ。神様はこんな素晴らしい子を授けてくださったから』」<sup>(2)</sup>

また、「アラブ幼年期新約聖書外典」は、大工ヨセフはいつも少年イエスを連れて仕事をしたとして、「ヨセフが角材を短くしたり長くしたり、あるいは幅を広くしたり、狭くしたりする必要があった時、イエスが丁度の長さや幅に手を伸ばすだけで角材は瞬間的にその寸法になり、ヨセフは手を触れることもなかった。このように、ヨセフは大工の仕事にはあまり熟練していなかった」と述べています。<sup>(3)</sup>

こうした話は、「神の賜物たまものがあればあるほど人間はそれを悪用して怠けるものだ」と、人間の尊さを否定しているように読み取れて、どうも納得いきません。また「どうせ神がすべてをなさるのだから、人間なんか不必要だ。飾り物か、操り人形のようなものだ」と言わんばかりの怠け心がどこかに潜んでいるようで空しくもなります。本当のヨセフは、神から託された使命を自分の利益のためには利用しなかったし、自由意志を欠いたロボットのように神に仕えたのでもありません。この地上の普通の人間とはかけ離れた異質のものであるかのようにびくびくしながら、神の全能に甘えて過ごしたので



もありません。ヨセフに関する福音書の数少ない記述を、一般社会人の常識を持って読む時、困難な状況にも驚くほど冷静沈着に立ち向い、たくましく人生を生き抜いた一社会人としてのヨセフ像が浮き彫りになってきます。



## 第二章 ナザレの生活

### ナザレの職人

ヨセフは大工であつたとキリスト信者の間で昔から伝えられています。が、「大工」と訳される元のギリシア語もそのラテン語訳も、「職人」というもう少し広い意味だそうです。確かに、ナザレのような小さな村では、各種の専門の職人がいたとは思われませんし、また一人の大工が一年中仕事をするだけの需要もおそらくなかつたでしょう。ですから、ヨセフは大工だけではなく鍛冶屋かじやの仕事もし、また必要に応じて頼まれた仕事は何でも引き受けていたと考える方が史実に近いようです。雨漏りの修理もしたでしょうし、洗濯板を作つたり、斧おのや鋏くわを研いだり、井戸でさえ掘つたかも知れません。何か



困った時にはいつでも頼りになる「何でも屋」であつたのではないでしょうか。

大切なことは、ヨセフがはつきりとした「職業」を持つていたということです。職業を持たない者は浪人で、人から疑いの目では見られないにしても、少なくとも「この人は何をして生計を立てているのかな」と不思議に思われなくてもかたがありません。「私は〇〇社に勤めています」、「私は主婦です」「私は自営業をしています」などと言えば、誰にでも身分証明として通用します。

イエスは大工の息子と呼ばれたことから、ヨセフは一生その「自営業」を続け、イエスにその職業を継がせたと思われれます。一生涯一つの仕事を続けることは決して容易ではありません。それが自営業なら、よほどの腕前と人の善さが備わつてなければ、時勢の変化に耐えて人の信頼を受け続けることはむずかしいでしょう。さらに、息子とその職業を継いだ事実は、父の仕事

に魅力を感じたことを物語っています。ヨセフは自分の仕事に誇りをもち、喜んでそれに取り組んだ結果として、周囲の人々から好かれ、尊敬されていたにちがいありません。このようなヨセフは、「新約聖書外典」に登場するヨセフと、どうしても相容れないように思えるのです。

### 仕事を尊ぶ

自分とその家族が生活する手段だからというだけではなく、自分の「職業」それ自体が価値あるものと考えるのは、社会人にとって当たり前のことです。が、多くのキリスト者は仕事をあまり重要視していないように見えます。それどころか、仕事は仕方なくするもの、有害なものときえ考える人もいます。長年アメリカで生活されていた、ある日本の経営者は、「西洋の人は仕事





は罰だと思っっているからできるだけ仕事を減らそうとしているが、我々日本人は仕事は尊いものだと思っっているので一生懸命働きます」と言っしまいました。一人の日本人からのこの鋭い指摘は、いつの間にか仕事は人間に相応しくないと言っう考えがキリスト教文化の中にはびこって来たことを表しているのではないだろうか。「もし、アダムとエバが罪を犯していなかったなら、私たちは働かなくても良かったのに」と嘆く人は「仕事は罰であって、もともと人間がするべき活動ではない」と、心のどこかで考えているのだと思います。「仕事は神の働きの延長で、人々への奉仕、歴史の中で神のみ旨むねを実現するための個人的な貢献である」と労働の尊さと意義を教会はたたえているにもかかわらず、多くのキリスト者は労働を必要悪とまでは言わないにしても、善と考えていないことは否定できません。

キリストご自身が「人間の手をもつて働き、人間の知性をもつて考え、人間の意志をもつて行動」<sup>(6)</sup>されたという事実が、一番はつきりと仕事の尊さを証明しているのではないでしょう。人間としてキリストは、仕事を尊ぶヨセフの心をそのまま受け継いだと言っっても過言ではないでしょう。

### 貧しく生きる

「神父さん、こんな商売をやっていたら救いは得られないから、子供たちが育つてからどこかの修道院に入ろうかと妻と時々話すことがあります」と建設業に携たずわる友人が話してくれました。

「イエスさまは、貧しい人は幸い、そして金持ちが天に入るのはいかに難しいかについて話しています・・・しかし、誰かが働いて金をもうけないと教会も建たないし、善業もできないし・・・」と彼は続けました。

一方では貧しく生活しなければと思っ、他方では生活をするにも、他人や

教会を助けるにもお金が必要だ。仕事に熱中し過ぎて中毒にまでなるのは問題ですが、一生懸命働いてそれなりの収入を得るキリスト者は、いつしかこのようなジレンマを感じるようになるのではないのでしょうか。

「貧しく生きることは、持たないことにあるのではなく、執着しないこと、物に対する支配権を自発的に放棄することにある。だから、実際には富んでいても、貧しい人がいるし、またその反対の場合もある」ことを、私は当時のわずかな経験と知識をもとに説明し、「正しく使うなら、お金や財産があればあるほど良い」と付け加えました。自分が前から心の隅っこで思っていたことをはっきり言ってもらった時のホッとした様子と同時に、「本当でしょうか」とうかがうような彼の視線を今でも覚えています。

貧しく生きることはキリスト教に限らず人間の美德ですが、それをまるで物乞いをするような生活と勘違いする人が時々います。ヨセフ、そしてイエスマまでもボロボロの服を着て、哀れな姿をしていたと思っている人たちです。

定職をもつて、長年ナザレで安定した生活をおくられたヨセフとイエスが浮浪者のように暮らしたとはとても考えられません。どちらかと言えばこのナザレの一家三人は周囲の人たちに裕福な家庭という印象を与えたのではないのでしょうか。

朝から晩まで、週六日間働くサラリーマンは契約通りの給料をもらうわけですが、普通は決して裕福と言われません。家賃、食費、光熱費、教育費、健康保険、交通費その他の生活費に加えて、将来を考えて貯めている貯金も計算に入れると、普通の給料にボーナスや残業手当を加えてもぎりぎりの生活となるでしょう。特別の出費をする時は、よくよく家計簿と相談してからでないといけないのです。自分の身分に相応しい生活をしているのですが、決して贅沢はできません。これが「社会人」の貧しい生活だと思えます。そしてナザレの家族の貧しい暮らしもこのような生活だったと考えるのが、福音書の記述に一番忠実ではないのでしょうか。





## 第三章 ベツレヘム行き

### 市民権

ヨセフ 人社会

「そのころ、皇帝アウグストゥスから全領土の住民に、登録をせよとの勅令が出た。これは、キリニウスがシリア州の総督であったときに行われた最初の住民登録である。人々は皆、登録するためにおのおの自分の町へ旅立った。ヨセフもダビデの家に属し、その血筋であったので、ガリラヤの町ナザレから、ユダヤのベツレヘムというダビデの町へ上って行った。」<sup>(8)</sup>

福音史家ルカが正確に報告している通り、ヨセフのベツレヘムへの旅が決まりました。ごく普通の社会人であるゆえに目立たないヨセフの本当の人物をもっと良く知るために、福音記者の言葉を通して彼の旅路をたどり、その

人柄を見ていきましょう。

まず私たちの注意を引くことは、ヨセフが一巡礼者としてベツレヘムへ行ったのではなく、一市民として行ったということです。今では聖地となっているエルサレムやベツレヘムは、当時はローマ帝国の僻地へきちともいうべき地方の小さな集落に過ぎなかったのです。

ヨセフは市民として、当時の国家元首が発布した法令に従ってベツレヘムへ行きました。「すべての権威は神から」<sup>(9)</sup> 与えられることを知っていたヨセフにとって、市民の義務を忠実に果たすことによって神の預言が成就するじょうじゆこととは別に不思議ではありませんでした。それどころか、社会人の義務を忠実に果たすことで、その態度や誠実な生き方を見た人々が神と出会うきっかけを得ると確信していたことでしょう。<sup>(11)</sup>

社会生活と信仰生活は水と油のように相容れないものだと考えているキリスト者がいます。社会は、墮落したバビロンのようなもので、神を信じる者



ベツレヘム行き



は、それに断固として敵対するか、影を潜めてほそぼそと生きるしかないと考ええる人です。「あなたが避けるべき根本的なまちがいを一つ教えよう。すなわち、あなたが生きる時代や環境、尊く正当な習慣と要請を、イエス・キリストがお教えになった聖なる道徳に合わせるよう導くことなど到底できないと考えること」<sup>(12)</sup>

このように考えているキリスト者は、社会の良いところが見えず、「良いカトリック信者であることと、忠実に社会に仕えることとは両立しない」と<sup>(13)</sup> 思い込み、法の順守は信者に相応しくないとさえ思っています。

たしかに不正な法には（つまり不正行為には）、加担できないはずですし、正義に反する法であれば、それを正すように動くべきでしょう。しかし、正しい法の順守は、神のみ旨は必ず実現すると信じるキリスト者として、他の市民と連帯し、「地上で神の国を建設する」つもりで大切にしなければなりません。交通ルールを守る、税金を納める、投票するといったことは、神に従うことに直結しているのです。

当時のイスラエル民族はローマ帝国の支配下にあつて、その多くは皇帝の法令を決して快く思っていないかもしれませんが、ヨセフは、決められたことを確実に守ったように見えます。それが社会人であるための条件だからです。

## 旅の準備

ヨセフがベツレヘム行きを最終的にいつ決定したかは定かではありませんが、数ヶ月の準備期間があつたと考えて良いでしょう。ベツレヘムはナザレから百数十キロ離れています。当時は三泊四日ほどの旅でした。出発に先立ち、ヨセフは、マリアが妊娠していること、ベツレヘムには大勢の人が集まること、留守中のナザレの仕事場のこと、旅行の費用、交通手段として使

うロバのこと、その他旅とベツレヘム滞在に備えて持つていくものを考慮して、綿密な計画を立てていたでしょう。堅苦しく「計画」とまで言わなくても、社会人なら物事を前もって考え、行き当たりばったりではなく、計画性のある行動をします。そして、入手できる限りの情報をもとに、最悪の条件にも備えることができ初めて社会人だと言えるのではないのでしょうか。

いよいよナザレを出発したヨセフは、妻マリアが身重みおもであったため、十分余裕をもってベツレヘムに着くように旅行の計画を立てていたことでしょう。マリアに無理を強いたための煩いもあつたでしょうが、預言通り幼子がベツレヘムで生まれるように協力したいという心もあつたかも知れません。

ベツレヘム滞在が数ヶ月間に及んだときのために、費用への配慮もしなくてはならなかつたでしょう。ベツレヘム、またはその付近に住む親戚や知り合いに助けてもらうように段取りができていたでしょうが、念のためにテントをロバに乗せてもつていったとしても不思議ではありません。私たちが乗

用車いっぱいに荷物を積んでキャンプに出かけるように、ヨセフがロバに食料、衣類、食器、毛布などのほか、生まれてくる赤ん坊のために必要なものを無駄がないように乗せて出発する様子が目に浮かびます。

### 旅の仲間

ヨセフとマリアがどのようにして旅をされたのか、何日かかったのか、同行者がいたのか、どの経路を通つたのかについての記録はまったくありません。

ベツレヘムへロバに乗って行つたと考えても、徒歩の速度とあまり変わらないので、一日八時間歩いて四十キロしか進めません。その上マリアが身重みおもでしたから、休憩をとりながらゆつくり行くとすると、一日に三十キロ





進むのが限界だったかも知れません。記録がないのですべて推測ですが、その場合は、途中で三泊したことになります。

マリアの胎内のイエスは、その三十余年後、良きサマリア人のたとえ話の中でエルサレムからエリコの間で強盗が出たとおっしゃっていますから、当時旅する人はなおさら盗賊に襲われる危険を考えなければならなかったでしょう。

ヨセフとマリアが、定期的に行き来する商人の群れに加わったのか、住民登録を済ませる目的でエルサレムやベツレヘム行きの人々が一団となつて行ったのか、知るすべはありませんが、二人だけの旅ではなかったと考えるのが妥当でしょう。

旅の仲間がいたとしたらヨセフとマリアが、周囲の人々と一緒に慎ましい楽しい旅をされるのが想像できます。と言うのはヨセフは人付き合いが上手だったからです。仕事柄そのように鍛えられていて、和やかな、誰にでも好

かれるような性格に自分を磨きあげていたと思われるからです。

私達の社会でも、どちらかと言えば、高い立場から人と接する職業があります。たとえば宗教家、医者、弁護士、大学教授、政治家、大企業の重役などは社会的に地位が高いと人からも言われているだけに、ややもすると人の接し方において訓練される機会が少なく損をすることもあるのではないのでしょうか。

他方、いわゆるサービス業に携わる人たちは、どちらかと言えば、人当たりが良くて心遣いが行き届いている人が多いように思えます。

ヨセフは、今で言うサービス業を営んでいたもので、どこに行っても、誰とでも上手くやっつけていける好人物だったとするのは言い過ぎではないでしょう。小さな村でお客相手の仕事をするとなると、その人柄の隅々までが皆に知られるわけですから、否の打ちどころのない誠実さがなければ長年尊敬されることは難しいものです。





少しでも汚点があれば、人々は何かのおりに嫉妬心しつとしんから、あるいは、復讐ふくしゅう心しんからそれを引つ張りだしてきて攻撃の的として使うことでしょう。「事業に失敗したではないか」、「不良息子がいるではないか」、「約束を守らない人だ」、「借りたものを返さない人だ」などなど。人々は好人物の息子イエスを激しく攻撃して、「田舎者」と言わんばかりにガリラヤ人と軽蔑けいべつしましたし、身分の低い出身と言わんばかりに「大工の息子」<sup>(14)</sup>と見下しましたが、イエスは親子共通の善良さに関しては何一つ言わせませんでした。

一緒に旅をした人だけでなく、途中で宿を貸してくれた主人や、休憩地と一緒になった家族、食料を売ってくれた商人など、多くの人が旅の仲間となつて、この旅の思い出を織りなしていったことでしょう。短時間であっても人との出会いはその人の一生を変えることも珍しくありませんから、ヨセフとマリアは「人との出会い」を大切にしたいと思えます。「どのような人と会えるかな」と楽しみにして旅をするのも二人の喜びだったと思います。



## 第四章 ベツレヘムで

### 宿探し

目的地が近づくにつれてヨセフは、ベツレヘムでの行動を頭の中でもっと頻繁ひんぱんに思い巡らすようになっていたでしょう。旅行中の人から、また途中の宿で色々な情報を取り入れ、出発前の計画はいよいよ具体的になっていったに違いありません。

「どこに泊まるか。まず、することは・・・」と何度も自分に言い聞かせて、頭に浮かぶ様々な予定や可能性を整理します。

どの町にも、当時の交通手段であった馬、ロバ、ラクダ、馬車などを「駐車」する広場があったそうです。水と牧草と、馬や動物を世話するための道



具も備えた場所です。宿泊施設がまだ十分なかった時代ですから、多くの旅人はこのような広場の一角で泊まったそうです。ヨセフは当然この可能性も考えに入れていたはずですが、しかし、入れ替わり立ち替わり知らない人が現れる所でマリアが出産するのは何とかして避けたいと思っていたはずですが。

この時期ベツレヘムは大勢の人でこった返しているはずだから、まず、泊めてくれる余裕のありそうな親戚、知り合い、友人から紹介された人、そしておそらく数少ない宿も全部当たってみよう。それが駄目なら、だれかの倉庫を借りられないものか。物置や家畜小屋でも良い。それも駄目なら、テントを使おう、とヨセフは色々な考えを巡らせるうちにベツレヘムに到着しました。

長い旅の末、多少は疲れていたでしょうが、マリアに旅仲間と一緒に待ってもらい、ヨセフは宿泊する場所を探しに行きました。宿にしても個人の家にしても、やはり人が多くなかなか空いた場所がない。迷惑そうに、そして少し失礼な態度で断った人もいたかも知れませんが、ほとんどはヨセフの礼儀正しい言葉と振る舞いに心の底から申し訳ないと思い、気の毒そうに空き部屋がないことを説明したでしょう。ヨセフは、人の立場に立って物事を考える人だったので、きつと、丁寧な礼を言っ、心を乱すことなく次々とベツレヘムの町を巡り歩いたと思います。

社会人にとって困難に出会うことは日常茶飯事です。新前の頃なら、困難に出くわすと「頭が真っ白になる」かも知れません。しかし、長年の努力、経験、周囲の助言などの積み重ねによって、「困難を処理する能力」を身につけているのが社会人です。同じ仕事を毎日同じように繰り返すだけではありません。やる気もあり、上司から能力を見込まれ、色々な仕事を任されて、人間は成長し、創意工夫も生まれる。少しベテランの域に達すると、分野外の仕事も恐れることなくこなせる「底力」のような、あるいは、「第六感」のようなものが身につけてきます。ですから、例えば一流の銀行員で



あれば、毎日の懸命な営業の割りに、ローンの売れ行きがあまり芳しくない結果となつても、すぐに落ち込んだり、やる気をなくしたりはしません。失敗を教訓として次の作戦を考えるはずです。また賢い主婦なら、適当な食料がないからといって、献立に戸惑うことはないでしょう。前日の残り物をどのように料理し直すかで困り果てることも、もちろんないでしょうし、かえっていろいろと工夫して材料の貧しさに気づかせず、残り物でできあがった品がもとの料理よりも好まれるようにするかも知れません。

職人ヨセフも、毎日の仕事の中で大きささまざまな困難を処理したはずですが、初めは経験がないため、もたもたしたでしょうが、徐々にコツをつかみ、ついに難しい課題も平然とやりとげるプロの域に達し、難しい状況に直面するとかえって意欲を燃やしていたと思えないでしょうか。

### 最善を尽くす

イエスがなぜ馬小屋でお生まれになることになったかを、ルカが「宿屋に彼らの泊まる場所がなかったからである<sup>(15)</sup>」と説明しています。

ギリシャ語の「カタリマ」は、「宿屋」、あるいは民家の二階の「客間」として使われた一番広い部屋の二つの意味を持ち合わせているそうで、この場合、イエスが「飼い葉桶<sup>おけ</sup>」に寝かされたのは、宿に空き部屋がなかったからか、それともある民家にお世話になったものの、ちょうど客間が空いていなかったのかは、はっきりしません。

理由はどうであろうと、イエスは「飼い葉桶<sup>おけ</sup>」があるところだから家畜のための小屋で生まれたことははっきりしています。ヨセフは宿屋か客間を一時断念せざるを得ませんでした。ヨセフは宿屋か客間を一時断念せざるを得ませんでした。ヨセフは宿屋か客間を一時断念せざるを得ませんでした。ヨセフは宿屋か客間を一時断念せざるを得ませんでした。ここにはプライバシーがあるし、ロバを休ませると



ころもあり、水もある。いざとなれば、近くに小屋の持ち主の家があると。予測していたとはいえ、救い主がこのような非常事態の中で生まれることは、ヨセフにとって身を切られるように辛かったはずです。けれども、ヨセフは第一に望んでいたことが叶えられなかったからといって、いつまでもくよくよ嘆いている人ではありませんでした。最善を尽くした後の結果を謙虚な心で受けとめることを知っていたからです。

「すべて自分の思うままにならないと気がすまない」という考え方は自惚れで、自分は宇宙の中心だと思う子供っぽい態度です。「自分は普通の人間だ」とヨセフはしっかり自覚して、「自分にできることと、できないことがある」と心得ていました。だから長年の経験を生かして全力を出した後は、その結果に満足します。なぜなら、それ以上は不可能だからです。「他の人と結婚していたら、他の職に就いていたら、他の国に住んでいたら」などと不可能なことを望んで悩むのは子供っぽいと言えません。

人間の限界とは別に、失敗や罪の形で顔をのぞかせる人間の弱さもありますが、自分は天使ではないことをヨセフは十分自覚していたはずですから、失敗があれば反省して、必要なら謝ることも償うことも恥とは思わなかったでしょう。失敗も罪も良いことはありません。しかし、幸いなことにそれらを謙虚に受けとめるなら、何よりも人間を成長させます。「あなたの深い謙遜が掘った穴に、怠慢や罪を償いとして埋めなさい。農夫が、腐った実や枯れ葉や落ち葉を木の根元に埋めるように。こうして、不毛であったもの、<sup>(16)</sup> というよりもむしろ有害であった物を、肥料として役立てるのだ。」

ヨセフにも、何らかの反省点はあったでしょうが、馬小屋で数日を過ごすことに対して、いささかの不平不満も人にも神にも持たなかったはずです。また、肩身の狭い思いとか、気恥ずかしい様子とかは、ヨセフとマリアには無縁で、むしろ喜んで馬小屋に入り「これにもきつと意味がある」と考えていたのではないのでしょうか。

## 多忙の日々

「ところが、彼らがベツレヘムにいるうちに、マリアは月が満ちて、初めての子を産み、布にくるんで飼い葉おけに寝かせた」とルカは、おそろくマリアの口から直接聞いたことを、簡潔に記しています。

クリスマス・カードにはよくイエス誕生の記念写真のような絵が使われま  
す。マリアが愛撫するよう<sup>あいぶ</sup>に幼子を抱き、後ろか横にヨセフが二人を見守る  
ように立っています。その物静かな印象だけを見ると、ご誕生の前後、ヨセ  
フは何もしなかったように思えます。

子供なら単純に、「ヨセフさまは何もしなくても天使が全部してくれたの  
ではないの」と言うでしょうが、人生経験豊かな社会人なら、当然そうでは  
なかったことがわかります。

ヨセフには、次々とする事が出て来たはずですが、馬小屋を住みやすくし  
て、妻のマリアに少しでも居心地よく過ごさせようと、経験豊かな職人とし  
て全力を注ぐ毎日だったでしょう。ちゃんとした家に引越して、それを住  
み心地よくするのにも大変な労力が必要なわけですから、短期滞在のためで  
あったとしても、家畜小屋を整えるのはどれほど困難だったか想像できます。  
皆から直ぐ信頼されたヨセフは、馬小屋の改造や道具や機材を自由に使用  
することを許されたでしょう。同時に他人から受けるだけで平気にいるよう  
なヨセフではありませんから、その代わりに家畜の世話を全部引き受けたか  
も知れません。

ヨセフは、まず雨や風や寒さから身を守るために一角を整えることから始  
め、マリアの様子をうかがいながら、食事や洗濯などの仕事も徐々に引き受  
けていったことでしょう。イエスが生まれてからは、一睡もできなかつた夜  
も何回かあつたはずですが、馬小屋の持ち主を始め、近所の人々の親切な心遣





いもたくさんあったでしょうがヨセフは手を休めることなく、いつも何かをしている。それにもかかわらず、いくらでも時間があるかのように人を相手にする余裕もあつたはずです。

「忙しい、忙しい」と連発する人は、いつも時間が足りなさそうで、不思議にもあまり仕事をしていません。まだ手を付けていない仕事があるので、他の色々なことに気づかないか、気づいてもとてもできないと思ひ込んでしまふ。だから、結果から見ても怠け者と言われてもしかたがないのですが、多くの場合、悪意はないようです。これもあれもしなければならぬと焦りだけが先行して、何を、いつ、どこで、など、基本的なことがらがつきりしないので、すべき仕事と「にらめっこ」していることが多いようです。

ヨセフは、仕事ができると定評のある社会人として、具体的に「各瞬間の小さな義務を果たし、なすべきことをし、していることに没頭して」<sup>(18)</sup>「毎日を過ごしたことでしょう。クリスマス・カードの「スナップ写真」は一日のほんの一コマにすぎなかつたはず。そして、あの平和な雰囲気は、むしろマリアとヨセフの心の中の状態だと私には思えるのです。

### 出産祝い

卒業式、結婚式、誕生日、成人式などには、親しい人からお祝いの便りや贈り物が届きます。遠方においても、仕事が忙しくても、病人看護などの様々な悪条件が重なっても、愛する者に心からの喜びをなんとか届けようと思ひます。

郵便局も電話も宅配便もまだないときに、神は、マリアとヨセフにご出産のお祝いの言葉を届けるために近くにいた羊飼いたちを遣わしました。

彼らは「急いで行って、マリアとヨセフ、また飼葉桶おけに寝かせてある乳





飲み子を探し当てた」<sup>(19)</sup>

ヨセフは、近づいて来る人々のざわめきを聞き、「このような遅い時刻に訪ねてくるのは誰だろうか」とそちらへ気を向けたことでしょう。何か尋ね歩いている様子でしたから、自分から出向いてみると、天使からのお告げがあつて、救い主である生まれたばかりの幼子を見に来たと。

「羊飼いたちは、この幼子について天使が話してくれたことを人々に知らせた。聞いた者は皆、羊飼いたちの話を不思議に思った」<sup>(20)</sup>

平和な夜が少し騒がしくなり、何があつたのかを知ろうと、付近の人々が起きてきましたが、羊飼いたちの話を聞くと、自分の耳を疑い、夢でも見ているのではないかと首を傾げながら帰っていききました。あざ笑う人、皮肉を言う人、お祭り気分になる人、色々といたでしょうが、おそらくこの出来事で神の遠大な計画がいよいよ実現することになると理解したのはマリアとヨセフだけだったでしょう。そして、ヨセフはマリアと同じように「これらの

出来事をすべて心に納めて、思い巡らしていた」<sup>(21)</sup>に違いありません。

祈るとは神と語り合うことだとヨセフは知っていましたし、身をもってそれを体験していました。祈るとは、一方的に、壁に話しかけるようなものではなく、また、心の落ちつきのために、眼の前には誰かに語りかけることもありません。ヨセフの神は生きています。「口があつても話せず、目があつても見えず、耳があつても聞こえず、鼻があつてもかけず、手があつても触れず、足があつても歩けず、そののどからは声がない」<sup>(22)</sup>ような死んだ神ではなかったのです。

今まで、色々なかたちで神の語りかけを体験していたヨセフは、今度は、初めて会う羊飼いたちから神の声を聞き、その優しい心遣いに与かることができました。

馬小屋で良かったんだな。あの飼い葉桶<sup>おけ</sup>も喜ばれたんだな。自分のしたことをすべて良しと神は思ってくださったのだ。ヨセフとマリアは嬉しくてじ



つとしていられませんでした。溢れ出るような喜びを、思いやりの行いにあ  
らわして、競争するようにお互いに気を配りました。

### 信じる人の道

「八日たつて割礼の日を迎えたとき、幼子はイエスと名付けられた。これ  
は、胎内に宿る前に天使から示された名である」<sup>(23)</sup>。イエスは割礼によつて、  
イスラエルの民に仲間入りしました。今日の洗礼にあたる儀式でした。

ヨセフには、イエスに割礼を受けさせない、あるいはその義務を遅らせる  
正当な理由がいくつもありました。イエスは普通のイスラエル人ではなく、  
救い主だ。故郷から離れて今は旅行中という特別な事情もある。エルサレム  
までは十キロもの距離があるなど。にもかかわらず、当然なこととして、貧

しい家族の捧げものを携えて、マリアと共に神殿に向かいます。

ヨセフは、一貫した理念をもつて市民としての義務を果たしたように、一  
イスラエル人としての宗教的義務も深い信念をもつて果たしました。彼にと  
つて、神殿は神の住まいで、そこで全能の神ご自身にいけにえを捧げ、その  
慈悲深い神から祝福をいただくのでした。

割礼の儀式や神殿での祈りや祭りを「ただの慣習」と考えていたイスラエ  
ル人は、司祭も含めて少なくなかったはずだ。おそらく彼らのは「形だけ  
の参加」で、人の目が気になるから、何か利益があるから、何となく気休め  
になるから従っていたのではないのでしょうか。

このことは、「ミサは長い」と言つて「ミサ聖祭となれば、時間を短くし、  
早くすませたくてたまらないので、自分も急ぎ、司祭をも急がせる」という<sup>(24)</sup>  
今日も時々見られる光景に通じるところがあると思います。「かたち」だけ  
で、それを支える信念がないと、体だけが参加して、心はまだ寝床にいるか、



あるいはその後出かけるデパートやレクリエーションにもう行ってしまっているかです。地域の行事はもちろん、どんなささいな仕事や健康上の事情もミサに参加しないための正当な理由にする。「ミサなんか意味がない」と思っているから、最小限のこと、しかもそれを<sup>しよしよ</sup>流々としかないのは当然です。ヨセフは違いました。ヨセフにとって儀式や祭儀に参加するのは形式上の行いではありませんでした。生ける神に触れる時であり場でした。日頃から「お世話になっている」神に惜しみなく時間を割いて、必要なら長い旅もいとわず、礼拝し、感謝をささげ、いたらない行いをゆるしていただき、今後とも見守ってくださいとお願いするのでした。

神殿を訪れた二人に、「持つている人はさらに与えられ、持つていない人は持つているものまで取り上げられる。」<sup>(25)</sup>と、マルコが記すイエスの不思議な言葉が、またもここで実現します。信仰に報いるためというより、今後の労苦に耐えることができるように、「恐れるな、私はあなたとともにいる。

しつかりやれ」と神がシメオンとアンナの一生を借りてヨセフとマリアを力づけます。

シメオンとアンナは神殿に来ていました。「主よ、今こそあなたは、お言葉通りこのしもべを安らかに去らせてくださいます。わたしはこの目であるの救いを見たからです」<sup>(26)</sup>と、シメオンが幼子を腕に抱えて言う、マリアとヨセフは驚きのあまり言葉を失います。神から託された始まったばかりの使命を全うしていこうとする二人にとって、神の祝福と義人の応援の言葉がどれほど心強くひびいたか想像もできません。人生の沿道で慰めや励ましの言葉をかけてくれた人々、聖霊に導かれるままに生きた人々のことをヨセフもマリアも一生大切に心に留めておいたことでしょう。マリアは、それから三十三年後、カルワリオへの沿道で心の裂けるような思いでイエスを見送った時、シメオンとアンナとのこの出会いのことをきつと思いついていたことでしょう。

## 第五章 エジプトへ

### 社会の日向と影 ひなた

東の国からの学者たちがエルサレムに到着し、人々の好奇心の的となります。彼らの身分はあまりはつきりしていませんが、王様との面会が許されたことから、身分の高い人たちであったと思われれます。

外交音痴というべきか、世間知らずというべきか、彼らは軽率にもユダヤ人を治めるヘロデ王に向かって、「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか」と尋ねます。王と王を取りまく人々は動揺し、不安を抱きました。王はその地位を巧みに利用して、自分の権力を守るための密かな企み<sup>ひそ</sup>を考え始めます。

不思議なのは、ヘロデ王の要請に応えて、メシアはベツレヘムで生まれるはずだと告げたイスラエルの司祭長たちと律法学者たちです。彼らは預言者を通じて語られる神を信じていなかったのか。もし信じていたのなら、自分たちが先頭に立ってメシアを拝みに行くべきではなかったのか。生まれたばかりの幼子が彼らに、「私の言葉を信じないなら、せめて私の行いを見て信じなさい」<sup>(27)</sup>と、自分が預言された救い主であることを示すときが来ます。

性悪説を唱えた英国の哲学者トーマス・ホブスのように「人は人に対して狼だ」と考え、人間は根底から墮落していて、すぎがあれば、自分の利益のために狼のように人を襲うと考えるのは行き過ぎですが、社会人は皆、世の中がユートピアではないことを知っています。悪そのものと決めつけられるような人間はいませんが、しかし人間が度々悪を働くことは否定できません。本来は良い人が、何かの折りに狐か、蛇か、または獠猛<sup>どうもう</sup>な狼になることもあるのです、十分に警戒しなければなりません。





ヨセフは、平和な田舎村ナザレの生活の中でも、弱さやずるさ、ときには悪意で不正を働く者から身を守る必要があったでしょう。悪を行うすきを与えないことで彼らを助けたかも知れません。また、ヘロデのように、与えられた権力を悪用する者がいることも承知していたはずですよ。

だからといってヨセフは、「世の中は汚い」とか「人は自分のことしか考えない」というような悲観論を連発している人ではありませんでした。というのは、全力を出してできることをしていれば、あとは神にお任せすればよいということを知っていたからです。「命のために何を食べようか、何を飲もうか、また体のために何を着ようかなどを心配するな」、「あなたたちがどんなに心配しても、寿命をただ一尺さえ長くできない」、「天の父はあなたたちにそれらがみな必要だと知っておられる」と、空の鳥や野の百合のように自然に、素直に、逆らわずに生きていけば、神はその他すべてを計らってくださいるとヨセフは知っていたからです。

「ある人たちは、あたかもトンネルを通り過ぎるかのよう<sup>(28)</sup>に人生を過ごし、信仰と太陽の輝きと確かさとを知らない」。ヨセフはそんな人ではありません。ヨセフには信仰があつたのです。

### 困難を恵みに

しかし、神は楽な生活を人間に約束しているわけではありません。かえって、神は「愛する者を皆、叱つたり、鍛えたりする」<sup>(30)</sup>。「毎日祈っているのに、いつも教会に行っているのに、なぜこんな病気や失業、家庭内の不和、事故などがあるのか」と不平をこぼす人は、困難というものは神の愛に反するものと考えているのです。神を自動販売機のように思い込み、これだけの「貢<sup>みつぎ</sup>」を納めたのなら、必ずそれなりの「幸せ」が出てくるものだ、とんでもな

い思い違いをしているのではないのでしょうか。

良識のある親は、わが子の幸せを望むからこそ、その子を甘やかしません。時間厳守、整理整頓、礼儀、勤勉、物や金銭を大切にすることなど厳しく教えます。それが思いやりであり、それが本当の愛だからです。

「起きて、子供とその母親を連れて、エジプトに逃げるように」と天使のお告げを受けた時、ヨセフは、不服ではなかったでしょうし、不思議とも思わなかったでしょう。「ヘロデが、この子を探し出して殺そうとしている」という理由も十分納得できたでしょう。大事業にはそれなりの困難が付きものですから、救いの業という大事業の実現に抵抗がない方がおかしいのです。「起きて、夜のうちに幼子とその母を連れてエジプトへ去った」とマタイ<sup>(33)</sup>が記すヨセフの素早い対応は、彼を日頃から鍛えられた人と考えなくては説明が付きません。しかも、ヨセフに予想外のことが起きたという印象は見受けられないのです。一種の緊張感をもって任務を果たす人には、独特の「勘<sup>かん</sup>」

が働き、見えないものも感じ取るものです。幼子とマリアの安全を確保するのが、最優先の課題で、全力をつくしてそれを実現するのが「心をつくし、精神をつくし、思いをつくして」<sup>(34)</sup>神に仕えることだとヨセフは確信していたはずです。

自分がいただいた命、人柄と人生経験、社会環境を活かし、できることは自分です。怠惰<sup>たいだ</sup>に負けて、不必要な奇跡を神に期待するのは、いただいたタレントを埋めてしまうのと同じだと、ヨセフははっきり自覚していたようです。神がすべてをなさるのなら、神に協力する充実感も喜びもなく、自分の存在理由もない。このあたりにヨセフの積極的な行動の動機があるような気がします。だからヨセフは、夜が明けのを待たないで、夜のうちに出発したのです。

お世話になった数人の恩人を夜中に起こして、ことの次第を説明し、やっかいな後始末については彼らの善意にすぎることになったでしょう。ガリ







ラヤへ戻る予定は無期延期になることを、やっとの思いで知り合いを通じてことづけたかも知れませんが、とにかく、あわただしい旅立ちとなりました。

「ヘロデが死ぬまで、そこエジプトにいた」<sup>(35)</sup>ヨセフは、エジプトの地で、今という外国人労働者のような移民となったのでした。イスラエル人が集う会堂を頼りにして行ったでしょうが、言葉、習慣、文化のちがいで、生活も生易しいものではなかったはずで、技術を身につけていたから、仕事には困らなかつたかも知れませんが、いつユダヤへ呼び戻されても良いような心構えも必要であつたので、落ちつかない面もきつとあつたでしょう。

後年、ヨセフとマリアとイエスは度々エジプトの思い出話をされたことでしょう。楽しい思い出ばかりだつたと思います。ヨセフは、エジプト滞在中、異文化を体験し、新しい言葉を学び、異なる生活習慣を身につけて、もつと幅のある人格を作り上げる機会にしたのではないのでしょうか。幼いイエスが何歳までエジプトで過ごしたかは定かではありませんが、後にイエスが示し

た異なる宗教や民族の人に対するあの理解と優しさは、このエジプト滞在とは無関係ではなかつたでしょう。

「ものは見方次第だ」とよく言われます。同じものが、見方によつては、災いであつたり恵みであつたりします。キリストが「体のともし火は目である。目が澄んでいけば、あなたの全身が明るい<sup>(36)</sup>が、濁っていれば、全身が暗い」とおっしゃつたことは、すべてを澄んだ目で見たヨセフの生き方でもあつたようです。



## 第六章 再びナザレへ

### 神の友

長い人生を歩んでいく間に、自分の人柄の一部とまでなあって身につく一種の「勘」とか「経験」のようなものがあります。そうした「勘」や「経験」があれば人と長く付き合っていると、その人が口に出さないことも察知できるようにになり、また、何をしたら相手を幸せにできるかがわかるようになってきます。

ヨセフは、人と接するときと同じ心をもって神とも親しくしていました。年月がたつにつれて、神の「心」がわかるようになったようです。「内的生活」という、人間と生きた神との親しい関わりがヨセフの心でたくましく成

長していたのです。

ヘロデが死ぬと、主の天使がイスラエルの地へ戻るようにとヨセフに告げました。「そこでヨセフは起きて、幼子とその母を連れて、イスラエルの地へ帰ってきた。しかし、アルケラオが父ヘロデの後を継いでユダヤを支配していると聞き、そこに行くのを恐れた<sup>(37)</sup>」。ヨセフの神に対する素直さは、無責任な「神任せ」ではありませんでした。神の「指示」には従いますが、決して自分なりに物事を考えることを放棄しません。ユダヤへ行くのをためらっていたヨセフに答えるかのように「夢でお告げがありました。そしてヨセフは「ガリラヤ地方に引きこもり、ナザレという町に行って住んだ」<sup>(38)</sup>。神とヨセフが親しく対話が続けてきた結果、物事を神の目で見ることができるようになっていたのでしょう。当時まだ幼いイエスがいつの日か、「もはや、私はあなたがたを下僕<sup>しもべ</sup>とは呼ばない。下僕<sup>しもべ</sup>は主人が何をしているか知らないからである。私はあなたがたを友と呼ぶ。父から聞いたことをすべてあなた



がたに知らせたからである」と、親しい弟子たちに諭すときがきます。そして、これは父なる神がヨセフにおっしゃる言葉に聞こえてなりません。「あなたを友と呼ぶ」と。

### 日常生活の偉大さ

キリストが公に教えを述べ始められたときには、ヨセフはもうこの世を去っていました。「この人は大工の息子ではないか」とキリストについて言われたのを聞くと、ヨセフはつい先ほどまで元気に働いていたという印象を受けます。しかし、いつの間にか去ってしまいました。すべきことをなし終えたと思つたら、お礼も言わせないようにして、姿を消してしまつたのです。「わたしは、戦いを立派に戦い抜き、決められた道を走りとおし、信仰を守り抜きました」と口に出すヨセフではなかつたでしょうが、彼の一生はそう語っています。<sup>(41)</sup>

パウロが残した業績は歴然としていますが、ヨセフの偉大さはいつたいどこにあつたのでしょうか。ヨセフには普通の社会人としての生活しかなかつたので、偉大さがあるとすれば、その「日常に」しかないと言わざるを得ません。「日常生活の偉大さ」と言つたら矛盾に聞こえるかも知れませんが、よく知られている一つの喩え話をもつて説明したいと思ひます。

ヨーロッパの町のある建築現場で多くの左官屋が煉瓦を積み重ねて壁を作る仕事をしていました。「何をしているのか」と一人の左官屋に尋ねると、「ごらんの通り、煉瓦を積み重ねているんだよ」と口数少なく答えた。もう一人の左官屋に同じ質問をすると、「お金のために働いているんだよ」と、あまり元気のない答が返ってきた。しかし、活き活きとして煉瓦を積み一人の左官屋がいました。「何をしているのか」と聞くと、彼は「私は大聖堂を



作っているんですよ」と誇らしげに答えたそうです。

三人とも同じことをしていましたが、その仕事をする姿勢の違いには驚かされます。私たちを取り囲む社会にも、一生懸命に働いているがうれしくない人たちがいます。怠けているのではなく、どちらかと言えば真面目に働いているのですが、することに生き甲斐を感じていない様子が、はたから見ていてもわかります。本気を出していないと言うよりも、本気になれないと言った方が正しいようですが、なぜでしょうか。

自他の失敗と反省から考えて、彼らは「仮の」人生を生きているからだと思えます。自分の本当にすべきことは他にあると心のどこかで思っているからです。今は、仮にこの身分であって、この仕事についていて、この場所にいるが、自分が本当に力を発揮できる所はここではないと思いつているから本気になれないのではないのでしょうか。または、ここは自分の居場所だと自覚しているが、まだ力を出す時が来ていないと思つている。「何か大きな

ことをする機会があらわれたら、その時こそ……」<sup>(42)</sup> それとも「これが片づいたら、その時こそ……」<sup>(43)</sup> と思つているのではないのでしょうか。とても厳しい言い方をすれば、現実からの逃避ということになるでしょう。無意識にでしょうが、「別の人と結婚していたら」「別の職場にいたら」「別の性格であつたら」などと理想化された夢に逃げ場を求めているのです。毎日の辛い現実を受け入れられないので、「仕方なしに」「嫌々ながら」生きているのではないのでしょうか。

ヨセフは、あの活き活きと働く左官屋のように「本物」の人生を生きていました。それは、毎日の自分の平凡な仕事が、いかに大切かを自覚していたからです。彼は、日常のささいな行い一つひとつをもって、家族を支え、地域社会に貢献こうけんすると同時に神の救いの計画を実現していたことを知っていたからです。

「ばかなことを言うな。キリストの大事業で、あなたの演じる役はせいぜ



い大きな機械の小さなネジにすぎないことは事実だ。

けれども、ネジがすっかりしまっただけでいなくなったり、はずれていたりしたら、どのようなことが起こるかわかるだろう。機械の各部はゆるみ、歯車はこわれてしまう。

そうなれば、仕事はうまくゆかず、おそらく、機械全体が廃物になるだろう。

一本の小さなネジの役目を果たす、なんと偉大なことだろう。<sup>(44)</sup>

世の中で一番大切なことをしていると自覚して、家事に従事している主婦がいます。喜んで、誇りをもって、タクシーを運転する人に出会ったと、とても気持ちがいいものです。使命感をもって患者を診る<sup>み</sup>医者がいます。自分の仕事は、子供の一生に大きく影響する<sup>と</sup>と考え、責任とやり甲斐を感じて働く教師もいます。

この人たちに共通していることは、みな自分は大切なネジだと自覚していることです。自分はネジであるという現実と今果たしている役目を受け入れているから、その現実と役目が好きだと思つています。「ただのネジ」と思わないで、ネジであることに誇りを持ち、ネジの役目を果たすこと<sup>によつて</sup>周囲の社会に最大の貢献ができると自覚しているのです。

教皇ヨハネ・パウロ二世は使徒的勧告『救い主の守護者聖ヨセフ』の中でこう教えておられます。ヨセフは、キリストの教えによつて偉大な使命にまで高められた平凡な社会人の模範である。本物のキリスト者であるためには、大それたことなどしなくても、日常の普通で純朴ではあるが、本物の徳を身につけるだけで充分であることをヨセフが証明してくれ<sup>(45)</sup>ると。

ヨセフの偉大さは、「日常生活」にあったのです。



## あとがき

「社会人ヨセフ」の原稿を丁寧に読んでくれた友人の一人が「聖ヨセフの苦しみについて書かれていない」とコメントしてくれました。

その通りで、私自身、伝記ではなくヨセフの一生の側面について書いているのだと、あらためて意識させられました。

ほぼ二千年前の人物ヨセフはキリストの保護者として広く知られているが、同時にごく普通の「社会人」でもあったことを浮き彫りにしたいと思っ  
て書き始めたものです。

福音書にはヨセフについての記述が非常に少ないことは皆さんご存じでしょう。これはヨセフが普通の生活を送り、取り立てて書き留めておく事柄が少なかったことを物語っていると思います。

しかし記述に値しないから大切ではないということにはならないでしょう。むしろ、普通の社会人にとって、記述に値しないほど平凡な人間の姿がもつとも参考になるのではないかと思います。

福者ホセマリア・エスクリバーはヨセフを社会人の「模範」と見ています。二千年の隔たりがないかのように、ヨセフは仕事において、人間関係において、困難な状況の受け止め方においてなど、多くのことを私達に教えてくれます。

「信仰と生活」シリーズは、私たちが信じていることをいかにして具体的に生活の中で活かすかをテーマにしていますので、会社員、公務員、主婦、自営業の人達などが暮らしの現場で何を大切にすべきかを扱います。

この意味で、社会人ヨセフの生き方はこのシリーズの目録のような役目も果たすかと思えます。時間の使い方、祈り、整理整頓、濃やかさ、親切、苦しみ、病気、障害など。こうした普通の生活につきものの事柄について、も





っと詳しく扱う出版物が続くことを願っておられる方々の努力でこのシリーズが成り立つのです。

大分教区長平山高明司教様をはじめ、多くの方々の励ましと支援によって始まったこの企画ですが、この場をかりて心からの感謝を表明したいと思えます。そして、この本が社会の中で毎日勇敢に励んでいるキリスト者にとつて、何らかの手助けとなり彼らのそうした生き方への賛歌となれば幸いです。

一九九八年

湯川文一

引用箇所一覧

- (1) 主に、ホセマリア・エスクリバー著の『知識の香』中の説教「聖ヨゼフの仕事場にて」を参照。  
拙著はこの説教を解説するつもりで書いたもので、以下この説教の引用箇所は省略する。なお、ヨセフに関する教会の教えと聖書学の最新の研究のまとめが、教皇ヨハネ・パウロ二世の使徒的勸告「救い主の守護者聖ヨセフ」にある。また、聖書学・神学の観点からさらに詳しく聖ヨセフのことを論じたものとして、M・ヘルナル著「山下房三郎訳」のナザレのヨセフ」がある。
- (2) 聖トマが書いたと伝えられている幼児期の新約聖書外典13章より
- (3) 『アラブの幼年期新約聖書外典』38章
- (4) マルコ6・3
- (5) 『現代世界憲章』34番参照
- (6) 『現代世界憲章』22番参照
- (7) ホセマリア・エスクリバー著『道』632番
- (8) ルカ2・15
- (9) ロマの信徒への手紙13・1
- (10) ホセマリア・エスクリバー著『拓(ひらく)』322番参照
- (11) 同
- (12) 同 307番参照
- (13) 同 301番参照
- (14) マタイ・13・55
- (15) ルカ2・7
- (16) ホセマリア・エスクリバー著『道』211番
- (17) ルカ2・6、7
- (18) ホセマリア・エスクリバー著『道』815番
- (19) ルカ2・16
- (20) ルカ2・17、18
- (21) ルカ2・19
- (22) 詩篇115・5-7
- (23) ルカ2・21
- (24) ホセマリア・エスクリバー著『道』530番参照
- (25) マルコ4・25
- (26) ルカ2・29、30

(27) ヨハネ 14・11

(28) マタイ 6・25、32 参照

(29) ホセマリア・エスクリバー著

『道』575番参照

(30) ヨハネの黙示録 3・19

(31) マタイ 2・13

(32) マタイ 2・13

(33) マタイ 2・14

(34) マタイ 22・37

(35) マタイ 2・15

(36) マタイ 6・22、23

(37) マタイ 2・21、22、23

(38) マタイ 2・23

(39) ヨハネ 15・15

(40) マタイ 13・55

(41) テモテへの手紙 二、4・7

(42) ホセマリア・エスクリバー著

『道』822番参照

(43) 同 776番参照

(44) 同 830番

(45) ヨハネ・パウロ二世、使徒的勸告

『救い主の守護者聖ヨセフ』24番参照

## 参考文献

『聖書』〔旧約、新約〕

バルバロ訳、講談社 1980年

『聖書』〔旧約、新約〕

新共同訳、日本聖書協会 1987年

『知識の香』ホセマリア・エスクリバー著

精道教育促進協会 1978年

『救い主の守護者聖ヨセフ』教皇ヨハネ・

パウロ二世、使徒的勸告

カトリック中央協議会

1991年発行

『ナザレのヨセフ』M・ベルナル著、

山下房三郎訳

あかし書房 1975年

## 発刊にあたって

### 『信仰と生活シリーズ』

今日出版されているキリスト教関係の書物を見ますと、神学書、信心書、聖人伝、教育書、小説や詩歌、エッセイ、評論など多岐にわたってそれぞれ素晴らしいものが刊行されていることが分かります。このような豊かな読書環境にあつて、当地の『くすのき出版』が特に読者の方々にお届けたいたいのは、私達の日常生活において信仰に合致したキリスト者らしい生き方できるようにやさしく実践的に教え諭すような書物です。

私達がキリストに出会い、その生き方に倣うのは、教会での祈りや秘跡の中だけでなく、一市民として社会人として一日の大半を過ごす職場や学校、家庭、地域社会の中でもあるはずで、キリストの三年間の公生活の前には、ナザレで過ごされた三十年もの隠れた生活、平凡で目立たない仕事の生活があつたことを忘れてはいけません。神の御子イエスは無限の愛をこめて家庭生活の中で、ヨセフの仕事場で御父から委ねられた救い主の使命を果たしておられたのです。

社会に生きる信徒が自己の持ち場ともいえるそのような日常の仕事や家事、様々な人間関係の中で主と出会うしないなら、聖化と使徒職の機会を見逃さずことになり、信仰が日常生活から遊離して形だけのものになってしまいます。今、日本の教会が目指している社会の福音化という目標も、信者一人一人がいかにキリストと一致し、日々の務めを通して自己と周りの人々を聖化していくかにかかっていると見えましよう。

このたび私の監修のもと刊行される『くすのき出版・信仰と生活シリーズ』が、社会の福音化のパン種となるべき多くのキリスト者に広まり、その霊的生活を刷新し向上させるものであつてほしいと願つております。真理のことがやさしく的確に伝えられるため、執筆者は日本の文化、精神風土に固有な親しみやすい表現を用い、生きた体験に基づき具体的、実践的な進めを与えるよう工夫しています。私は大分で生まれたこの企画を奨励し、これが教会に仕え、市民社会の健全な発展に役立つ手段となりますようお祈りいたします。

---

湯川 丈一 (ゆかわ・たけいち)

属人区オプス・デイ司祭

1951年9月2日ブラジル、サンパウロ州生まれ

1975年3月サンパウロ大学工学部卒

1980年8月15日司祭叙階

現在 大分市城南台コファランス・センター指導司祭

大分教区要理教育委員会委員長

---

**社会人ヨセフ** 信仰と生活シリーズ 1

---

著者 湯川丈一

総監修 大分教区長 平山高明司教

1998年8月15日 初版発行

発行者 本間範男

発行所 **くすのき出版**

〒870-0826

大分市城南西町734-1

TEL.FAX 097-547-0741

デザイン・レイアウト 橋口 恵美子

カバーイラスト 中島 容太郎

製版 印刷 丸徳印刷株式会社

乱丁・落丁本は小社あてにお送りください。

送料は小社負担でお取り替えます。

---